

# カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

## 第1回 (株)日建設計とFCバルセロナ

記念すべき第一回は、FCバルセロナのホームスタジアム「Camp Nou」の全面改修設計プロジェクトを26チームの競合で勝ち取った(株)日建設計さんにドアノックです。お相手は 小堀 徹さん、スタジアム設計責任者で執行役員の小堀 徹さん、スタジアム設計責任者で執行役員の小堀 徹さん、スタジアム設計責任者で執行役員の小堀 徹さん。



**AMICS:**日本の企業がヨーロッパ、アメリカのライバルを相手に勝ち抜いたわけですが、まずどんな提案プロセスだったのでしょうか

**村尾:**26チームのエントリーだったのですが、国際的な建築家とカタルーニャの建築家の組み合わせが前提条件で、「他のどこにも似ていないもの」が求められていました。提案プロセスが変わっていて、FCバルセロナの選考委員とのワークショップを重ねるといって、類を見ない方式でした。書類審査でまず8チームに絞り込まれ、その後さらに詳細要項や膨大な資料に沿って3回以上のワークショップを重ねて最終案の提示となりました。

**AMICS:**御社にとって、ヨーロッパで初めてのコンペ参加にあたってどんな作戦でいったんのでしょうか

**小堀:**ローカルパートナーとのジョイントも含め参加にあたっては、当社内にカタルーニャ出身の社員がいたことをはじめ、いくつかの幸運があったと思います。なにしろ日本というよりアジアからの参加は1社だけでしたから。8チームに選ばれた時点で説明会に呼ばれ、そこでのごたえがしっかりあったので、「日本で考えて戦うのではなく、現地の空気や人を直接感じながら考えよう。」ということで村尾をはじめ数人をバルセロナに住ませることにしました。かなり長期間にわたって滞在したメンバーも

いました。実はヨーロッパのチームもアメリカのチームもバルセロナにはその都度通ってくるわけで、毎日現地にいるということが、先方からの要求に対して迅速な対応を可能にし、コンペを通じた信頼獲得に繋がりました。

**村尾:**試合のある日、ない日、仕事を含め前後トータル1日をどう過ごしているのか。またFCバルセロナを支えている人たち、会員たちはこの全面改修にどんな思いを持っているのか、食事を含めた付き合いを行いました。あなたたちはどんなスタジアムを望んでいるのかと直球を投げたところ、こう返ってきたんです。「俺たちはスペイン人でも、バルセロナ人

でもない、地中海人なんだ。」「地図を見てみる。イタリアは東の端っことで、ここバルセロナが地中海の真ん中なんだ。」「メディタレニアン(地中海人)であること、これは大きな発見でした。確かに住んでみると太陽、海、風が、そしてその中で朝起きることが気持ちいいんです。気候的にも、住んでる人間としてもオープンで風通しがいい。それならCamp Nouもそうあるべきじゃないかと考えはじめました。

**AMICS:**8チームに絞られてからのFCバルセロナの選考委員とのワークショップにもそういった発想が反映されたんでしょうか

**村尾:**そうです。提案要項にはスタジアムにはファサード、つまり外壁を作ることが要求されていたんです。しかしファサードがない方が観客席へ光や風が抜ける。本来は、コンコース幅は10mもあれば十分なのですが、これをさらに10m幅を広げて「オープンなテラス状のスペースを作る。これなら雨でも濡れることはない。さらには空気の流れがいいということはピッチの芝生育成にも良いと考えました。30以上のファサード案を作った上で、自分たちはオープンファサードで行きたいと主張したんです。選考ディレクターは8チーム全ての提案を見ているので、こういう提案も入れておこうと思ったんだと思います。

**AMICS:**FCバルセロナということで、他に提案のキーになった考え方はありましたか

**村尾:**選考委員は相当なスタジアム建築のプロフェッショナルです。提案を読み解く能力が高い方ばかりでした。我々の提案は「民主



オープンテラスからイメージした外気が通り抜けるコンコース(通路)

的(デモクラティック)である」という評価をもらいました。現在のCamp Nouは、VIPや上級会員のシートの上にだけ大屋根がかかっています。今度の全面改修では10万人の観客に同じ環境を与えたいというのです。そうすると今の大屋根をどうするか?それは、Camp Nouのシンボルでもあり、そこに集う人々の「記憶」でもあります。そこで大屋根のシャープな形を外側にひっくり返してエッジの効いたコンコースを形成し、その上に全周同じ形状の屋根で覆うという提案をしたんです。これは「記憶の継承」であるとともに「民主的」であると、高く評価してもらいました。

**AMICS:**現地のアーキテクト、バスクル・アウジオとの進め方はどういった感じだったのでしょうか

**小堀:**バスクル氏自身はバルセロナ大学でも教鞭を取っていましたが、事務所メンバーの中にはFCバルセロナの会員もいました。彼らの事務所には、スタジアムの実績はありませんでしたが、お互いに対等なパートナーというスタンスで進めました。

**AMICS:**スタジアムを使いながらの全面改修とのことですが、今後どのような展開をしていくのでしょうか?

**村尾:**来年3月までは基本設計を進めている段階です。4月から12月には実施設計、着工は2019シーズン、全面オープンは2022シーズン

の予定です。

**AMICS:**今日は提案作業を彷彿とさせるリアリティに富んだお話を伺えました。お忙しいところ、大変ありがとうございました。

<AMICSの眼>

(株)日建設計さんはストック型社会における建築のライフサイクルデザインに多くの実績を持っている企業ですが、今回のお話でも「記憶」や「継承」という言葉が、FCバルセロナとの共通のキーワードになったことがわかりました。記憶の染み付いた建物、その建物と一緒に一生を過ごす人々を幸せにする空間、日建設計さんの掲げる「パブリックスペース」とは、まさにそういう意味だそうです。「サッカースタジアムは誰のものか?」インタビューからは、プロジェクトを通じて、オープンでデモクラティックな地中海人との、気持ちの良い関係が発展していく手応えを感じました。

(取材/文 原正彦)

\*Camp Nouスタジアムはカタルーニャ語「カム・ノウ」ですが、当記事では日本での呼称として「Camp Nou」としました。(編集部)

現在のスタジアムにかかる大屋根



## Topics

### 世界から結婚写真撮影に選ばれるバルセロナ

CESC GIRALT



旅行業界は、バルセロナでの外国人ウエディングが成長分野であることを確信している。2012年から2016年の間で、外国人のカタルーニャでの結婚式開催は16%伸びた。プロポーズの日だけでなく、その前や後にわざわざゴシック地区、ボルン地区などにある主要なガウディ作品と写真を撮るために、彼らはバルセロナを旅する。

ジュディス・ベレスはルポルタージュ作者、今回リリとチェンの写真撮影をする。結婚写真を得意とするジュディスは、カップルを待ちながら「私の顧客は、大半は結婚前や、結婚後に写真を撮りに来る中国人やシンガポール人。webページを介して私に依頼がきます。今回、異なる場所での4時間1セッションの写真撮影を提案したところ、それが受け入れられ、サグラダ・ファミリアで待ち合わせをしました」と言

う。すぐにカップルが、2種類のドレスやアクセサリを入った巨大スーツケースとともに現れた。頭にティアラをのせ、目がくらむようなヒールを履いた女性が白いタクシーから降りると、サグラダ・ファミリアの前に集まった群集は、驚いて楽しそうにリリのポーズに呼応し、「カップル万歳」、「最高の願い!長い人生を!」と声を上げた。

サグラダ・ファミリアの後は、ゴシック地区のお気に入りの場所サン・フェリプ・ネリ広場に移動。リリは自国での披露宴会場に、バルセロナで撮った写真を飾るそうだ。「多くの香港人はパリやブラハを好むけれど、私たちはバルセロナの方がもっと好きです。すでに何回も来ました」と、髪形を直しながら語った。

「最初の頃の顧客は、インドやロンドン、ニューヨークに住むインド人やイスラエル人、アメリカ人でした。インド人は、式典のMCや複数の料理人まで連れてきてましたよ」とパーティーコーディネーター、トニー・セギーは言う。トニーが働く会社では500人収容可能な4つの会場を備え、

パーティー招待客たちは5日間ほどバルセロナに滞在する。

バルセロナ観光局は、昨年、結婚式の地としてバルセロナの街やその周辺を宣伝し始め、国際会議を開き、ウエディングプランナーたちを招待した。ラウラ・ベレスもその一人で、バルセロナで自身の会社を10年前に立ち上げ、2012年の初めごろから、インド人の関心の高まりを感じとっていた。日本人、韓国人、マレーシア人、シンガポール人、香港人も同様に増えていった。また、ドバイやカタール、サウジアラビアからカタルーニャに来る人も増えている。

「様々な文化や人種のカップルたちは自国で結婚し、その後に、ここバルセロナで、2回目のセレモニーをやりませう。なぜなら、この建築と、白いドレスの組み合わせに魅了されるからです。他のカップルたちも、結婚式の前か後にグエル公園や、サグラダ・ファミリア、ゴシック地区などのガウディ作品と写真を撮るために来るのです」と、ラウラ・ベレスは語る。

カメラマンのヘルマン・ベジャビスタは「10年前から、写真を撮るために何度も外国に旅行をしていが、今は国を出ずにいます。バルセロナが流行の場所であり、アラブやコロンビア、アメリカなどから人々が口コミで広がり増えている」と言う。

(ラ・バングアルディア紙ほか)